

# 日吉台地下壕保存の会会報

第92号  
日吉台地下壕保存の会

## 今年度総会盛会裡に終了

2009年5月23日(土)本会の総会が慶應義塾大学藤山記念館大会議室で行われました。総会に先立って本会の茂呂秀宏運営委員より調査報告「日吉の空襲について」として、この間調査が行われてきた日吉の空襲の実態について報告が行われました。これまで明らかではなかった横浜北部の空襲について画期的検討が行われました。その後横浜大空襲を記録する会会長今井清一先生(横浜市立大学名誉教授)をお迎えして「横浜の空襲の位置づけ」についてご講演いただきました。全国の中での横浜大空襲の位置づけがご講演の中で明らかにされました。(資料参照)

総会ではこれまで一年間の活動を振り返りつつ、新年度の活動方針について討議がなされました。特に運営委員の構成について、慶應大学の中により多くの運営についての協力者を求めるなどいくつかの課題について話し合われました。

総会後、同会議室において懇談会が行われ、保存の会についてのそれぞれの思いが語られ、有意義なひとときが過ごされました。

### 講演会

#### 1. 調査報告

「日吉はなぜ空襲されたのか?」 実態調査報告

日吉台地下壕保存の会運営委員  
茂呂 秀宏

#### はじめに

①調査の動機 「三度にわたる日吉の空襲の原因は、日吉に連合艦隊司令部などの海軍の軍事施設があったかららしい」という地下壕案内説明を実証的に裏づけたいという動機。

#### ②調査の二つの方法

- ・聞き取りによる日吉の空襲被害状況調査
- ・空襲を実施したアメリカ軍などの資料研究

#### 1.聞き取りによる空襲の実態調査結果

##### ①日吉の空襲被害状況

調査方法は戦争・空襲体験者との関係者11名からの聞き取りによる

調査概要 (資料1参照)



講演者 茂呂秀宏氏

## 調査結果 (図1参照)

被害地域	空襲の日・方向	物的被害	人的被害等
宮前地区 (神奈川区～箕輪～ 宮前から川崎市へ)	4月4日 4月15・16日 大空襲少し前(5.24?) 5月29日 南西方向から飛来	31軒中24軒焼失 強制移転家屋あり	足立さん宅4名爆死 消防団員川端さん宅 父を除き全員焼死 井上さん宅老人焼死
箕輪地区	4月4日 4月15・16日 5月24日 南西方向から飛来	約50軒中約25軒焼失 大聖院は4/4に被災 強制移転家屋あり	宮前の聞き取りで、小嶋方の子供が不発の焼夷弾の爆発で死亡との証言あり
大門方面	4月15・16日 西南西から	20軒中18軒焼失	寝たきりのおばあさんが焼死
金蔵寺～日吉駅前 (～慶應義塾工学部 ～大門方面から川崎へ)	4月15日夜～16日未明まで	金蔵寺観音堂焼失 日吉台国民学校全焼 日吉駅前日吉郵便局より駅舎側が全焼	駅前の時計屋さんが焼夷弾の直撃を受け首が飛び死亡
慶應義塾	4月4日 4月15・16日  その他	寄宿舎前体育会施設 (機関科が使用)焼失 医学部予科本部・工学部(前藤原工業大学)が80%焼失。 第1校舎に機銃掃射・焼夷弾投下、寄宿舎周辺に焼夷弾投下、鉄筋の建物だったので、炎上せず。	兵士1名死亡  工学部職員3名死亡 義塾の総焼失面積 4200余坪 焼失率31%
その他 日吉公園下の日吉二丁目から日吉神社下にかけての地域も空襲を受けているとの情報あり。規模については、証言によって異なる。4/15・16の空襲で、撃墜されたB29の搭乗員に被害を受けた住民が危害を加えたという証言もある。			

## ②聞き取り結果(図1)から分かること

日吉の空襲は主に地下壕の入口付近とその延長線上に集中しており、この空襲が何らかの意味で「地下建築物＝地下壕」を意識した上で意図的な空襲であった。

## ③なぜそのような空襲が行なわれたのか。

この空襲は米軍がここに連合艦隊司令部をはじめとした重要海軍施設群があることを認識し、それを破壊するために行なわれたと断定することはできない。なぜならば、投下された爆弾が焼夷弾中心であり、地下施設の破壊を目的にした空襲ではないこと、また、爆撃調査団報告やその他米軍資料などから裏づけられない。それではなぜ地下壕入口付近に攻撃が集中しているのか。それは、2の米軍の文書や写真資料調査とあわせ検討されなければならない。



図1

## 2.米軍文書(文書・写真)などの資料からの調査

① 米軍は日吉(慶應義塾=海軍軍事施設群)を重点攻撃目標にはしていなかった。

資料2 (川崎の空襲の記録 資料編より・・・1945年南東京・川崎横浜に与えた被害 1945年4月15日の飛行作戦) には、米軍が設定していた重点爆撃地域が書かれてい

る。日吉に一番近接したものは、攻撃目標番号「90. 17-3606」である。(90は日本、17は関東、3606が地域を示す) 日吉はこの枠外となっている。

横浜の空襲の記録4（米陸軍航空軍史）によると、90.17-3606は、川崎都市地域第3号となっており、爆撃の相対的重要度からするとABCのうちCランクとなっている。

また、資料3は地域目標90.17-3606の航空写真であるが、この写真には慶應義塾が大学として表記されており、慶應義塾=海軍施設群ととらえられてはいない。また、ここが、攻撃目標地域外となっており重点的な攻撃目標には入っていなかったと判断できる。

- ②しかし、日吉は三度以上にわたる空襲をうけた。なぜか。今年1月から横浜の空襲を記録する会と保存の会との合同研究会での研究成果をふまえ、いくつかの仮説を立ててみた。
- ③4/15～16日の空襲被害の資料2の中にある9 10 11の焼失地域は、位置関係からいつて慶應義塾を含めた日吉地域にあたり、米軍はこの地域に空襲を行なったことを認識していたことがわかる。「川崎の空襲の記録」の別頁に、9が住宅地域で187平方フィート、10が軽工業地域で593平方フィート。11が軽工業地域で250平方フィートが破壊されたと記録されている。(資料4)、この9 10 11の空襲は日付からすると、保存の会が実施した住民からの聞き取りによる日吉の4月15日・16日の空襲(金蔵寺～日吉台小学校～駅前～慶應義塾工学部～大門などが焼失した空襲 「資料日吉は戦場だった」参照)と同一のものであると考えられる。そうすると、日吉の4月15・16日の空襲は川崎や東京南部・大田区の空襲との関連でその原因を考えなければならない。

そこで、まず第一の仮説であるが、4月15・16日の日吉の空襲は川崎・東京南部空襲の「はみ出し空襲」であるとの仮説を立ててみたい。空襲の研究者の業界用語となっている「はみだし空襲」という概念は「Collateral Damage=戦闘における二次被害」という軍事用語からきているものであり、実際米軍の関係資料にも、この日の空襲は東京・川崎・鶴見を目標としたものであり、鶴見川以西の空襲は「はみ出し空襲」であると記述されている(出典「米陸軍航空軍史」) すなわち、「はみ出し空襲」とは爆撃目標地域への飛行コース上で目的地域の前後に拡大された空襲ということである。(爆撃目標地点以前のものが「近弾」、以後のものが「遠弾」という)。4月15～16日の日吉の空襲は東京南部・川崎空襲の「近弾」による空襲であるとする仮説である。住民証言によるB29の飛行コース(西南西から来て川崎に抜けたという)の証言からも裏付けられる。また、このコースの南西の延長線上に大曾根・新吉田・小机・菅田などがあり、これらの地も同日空襲を受けている。ただ、「近弾」の距離がどの程度もものなのか、また、その地域自身への爆撃目標設定が無かったのかどうか検証しなければ断定することはできない。

- ④次には第二の仮説であるが、この地域自身が文書的に確認できる米軍の主要な爆撃目標地域に指定されなくとも、悪天候や空襲による建物の炎上による煙りなどで視界が悪くなり第一次目標に爆弾を投下できなくなった時に設定さる第二次第三次的目標に設定されていた可能性はないかということである(常に攻撃パイロットの指揮官には、第二次・第三次目標への攻撃指示はなされていたという)。前述した金蔵寺から大門にかけての空襲に即して言えば、日吉台国民学校に海軍の功績調査部が入り、大門の北側に高射砲の探照灯陣地があり、二次的目標として設定される可能性を否定すること出来ない。
- ⑤ 第三の仮説であるが、これは第二の仮説と同様、第二次攻撃目標としての設定を考える仮説である。具体的に、4/15～16の空襲で9割近くの農家が焼けた大門・仲町地域は、人事局地下壕の出口の延長線上にあり、また、地下壕建設当時出された土砂などによって埋め立てられたと推定できる区画が壕の出口と集落の間にある。米軍がそれらを上空からの視認なし航空写真から読み取り、そこから何らかの巨大地下施設の建設を予想し、かつ、それらを破壊するためにではなく、その動きに対しての牽制ないし、住民への動搖・不安を増長させるための空襲=爆弾ではなく焼夷弾を主体とした空襲を行なったのではないかとの仮説である。最近入手した昭和22年の米軍の航空写真から、地下壕の出口周辺に地下壕建設の際に出された土砂が堆積された区画らしきものが識別できる。戦時中に米軍は爆撃

目標を設定するために撮影した航空写真からそのようなことを読み取っていた可能性は十分にある。(この残土捨て場と写真との関係については、最近実施されたバレーコートの航空本部壕の発掘調査での慶応義塾民族学考古学研究室安藤広道准教授の見解からの類推である。専門家の鑑定が必要とされる。)

- ⑥ 金蔵寺～大門にかけての 4/15～16 の空襲について三つの仮説を上記のように立ててみたわけであるが、これを日吉全体にあてはめるには、宮前や箕輪の空襲や慶応義塾の地上施設に対する空襲についても同様な検証が為されなければならない。

まず、宮前についてであるが、住民の証言によれば、宮前地区の空襲は、4月4日、4月15～16日、5月24日、5月29日の4回行われている。4人の死者を出した4月4日の空襲であるが、この日の空襲については米軍資料によると、立川が主要な目的であり立川が不可能な時は第二次目標として川崎(爆撃の中心はほぼ日本鋼管)が挙げられていたという。住民の証言からの飛行コースでは、南西の方向から宮前地区にはいり川崎に抜けており、宮前の空襲は立川・川崎の「はみ出し空襲」であったとの第一の仮説は成り立つ可能性はある。この飛行コースの手前の延長上にある神奈川区もこの日ひどい空襲を受けている。これは、米軍資料によると川崎と誤認しての空襲と判断できる記録がある(有りん365号 今井清一見解)4/15～16の空襲についても川崎・東京南部空襲のはみ出し空襲との仮説も成り立つものと思う。また、第二の仮説の軍事施設などを第二次目標とした空襲であるが、ここには軍事施設はないが、この地域の西南部には爆撃目標にされ航空写真も取られていた岡本工作機械製作所があり、岡本空襲の「遠弾」ということも考えれるが、岡本は空襲は受けおらず(後述)その可能性は薄い。さらに第三の仮説については、米軍の昭和22年のこの地域の航空写真(資料5)をみると、宮前の山の根にある集落に前述した白い区画が点在していることがわかる。大門同様第三の仮説は成立つものと思う。

- ⑦ 次に箕輪町の空襲についてであるが、4/4 4/15～16、5/24 の3回空襲を受けている。被害が一番多かった5月24日の空襲については、「東京に来襲したB29の一部により、6ポンド油脂焼夷弾が投下され、鶴見、神奈川、西、中、保土ヶ谷、港北、戸塚の各区・・に被害があった」(横浜の空襲と戦災1より)とされているが、この一部のB29がどこを主要目標としたのかはわからない。ただ、箕輪には、前述した岡本工作機械製作所があり(資料5参照)、岡本工作機械製作所への攻撃による二次被害という推論もなりたつが、岡本は空襲を受けていない。すなわち、米軍が1945年2月28日撮影した攻撃目標とした地域や建物の写真と昭和23年の米軍の写真を比較すると、大半の建物はそのまま残存しており、全体的に焼失した形跡がみられない。また、戦後新横浜に移転した岡本工作機械製作所の保有している社史にも日吉本社空襲の記録はなく(六郷工場、矢口工場が全焼したことは記録にある)、岡本工作機械製作所の日吉本社は攻撃目標にされ航空写真まで取られていたが、実際の空襲は受けていない。特に、終戦の翌月早々には米軍の第8軍が日吉本社を接收しており戦後の利用のことを考え空襲を行わなかったものと断定できる。故に、5月24日の空襲については、第一の仮説の「はみ出し空襲」にも第二の仮説の軍事施設などをターゲットにした第二次目標の空襲の可能性もない。唯一考えられるのが、大門や宮前同様の第三の仮説である。ここでも、戦後の米軍の写真に壕掘削の際の残土を捨てた区画らしきものがみられる。ただし、4月4日、4月15・16日の空襲については、第三の仮説以外に、第一第二の仮説は成り立つものと思う。

- ⑧ 最後に慶応義塾に対する空襲であるが、まず第一の仮説の「はみ出し空襲」についてであるが、4/15～16の工学部などへの空襲については考えられる。4/4の体育会施設(機関科)の空襲も同様である。次に第二の仮説ではあるが、海軍の地上施設利用についての米軍の認識については地下壕と同様不明であり、第二の仮説が成り立つとは断定できない。ただ、空襲の結果を見るかぎり、焼夷弾による攻撃はキャンパス上建物全域に及んでおり(その結果、木造建築物については、その多くが焼失し、コンクリートの建物は残った。)、なんらかの意図が働いた空襲であったと思う。このことは、第三の仮説ともからみ、地下構造物の認

- 識と地上の構造物の関連は当然予想されることであり、第三の仮説はありえるのではないかと思う。
- ⑨ 以上3つの仮説をもって日吉の4地域の空襲の検証をしたわけであるが、結論的には以下のように言うことはできないだろうか。まず、日吉4地域の空襲にすべて共通していることは、第三の仮説である「壕の残土区画の認識から推定される大規模地下施設建設工事に対する牽制、ないしは、住民への動搖・不安を増長させるための空襲」との仮説であるが、この空襲をベースにし、その上に第一の川崎ないし川崎・東京南部空襲の「はみだし空襲」と第二の仮説の地域にある海軍軍事施設などに対する第二次目標的空襲が重ねられていたのが日吉の空襲だったのではないかと。
- ⑩ 最後に、以上三つの空襲仮説は、あくまで、米軍がこの地域に連合艦隊司令部や海軍諸施設群があったということを認識していなかったということを前提にしているわけであるが、もし、この前提を崩し、ここに連合艦隊司令部を初めとする海軍の最重要施設があったと認識していた上で空襲であったとした場合どんな仮説が立てられるか考えてみた。まずその場合、以下の疑問が出てくる。先ずは、連合艦隊司令部への攻撃という超一級の攻撃目標設定なのに、文書に残るような公式のものではなく、「秘密裏」になされたのか、次には、地下壕の破壊また、堅牢な建物である第一校舎などの破壊を意図するものならば、なぜ爆弾中心の空襲を行わなかったのか、という疑問がでてくるが、その疑問に答えることのできる第四の仮説を立て問題提起としておきたい。
- ⑪ 第四の仮説として、「米軍がここに連合艦隊司令部などの海軍施設軍が入っていることを知りながら、戦後利用を見通した上で、軍や住民に対する牽制、動搖・不安そして厭戦気分を増長させるための空襲であった」という仮説を提起しておきたい。このように考えると、この地域の空襲が焼夷弾を中心とした空襲であったことが理解できるし、また、米軍が慶應義塾に敗戦直後9月6日に接收を通告し、9月8日には、手際よく接收を実施していることも理解できる。(米軍の引渡しに立ち会った予科の教授(息子さん)などの、「引渡しの時点において、第一校舎のどの部屋にどの将校が入るのか、何に使うのかと言うことまでがすでに決まっており、迅速に引渡し業務が行われた」との証言もありよく理解できることである。

米軍の戦後利用の件については、東京では日比谷の第一生命のビル、横浜では、横浜港の施設、グランドホテルなどなど 近くは前述した岡本工作機械製作所の日吉本社の例などと枚挙には暇はない。このような判断については文書的裏づけはないと思うが、結果判断で、断定できるものは多いと思う。このような判断の文書的裏づけについては、これらがそれなりに高度な政治判断でなされたことであり、文書自身が存在するものなのか、または、あるが今は公開

されていないものなのか分からぬ。これからさらなる研究成果を待つ他ないだろう。

3. 当面の課題として、日吉地域の追加調査継続、また、既に着手されている綱島・大倉山・菊名・小机を初めとした日吉周辺地区の空襲の実態調査の推進、そして、それらの成果との関連の中での日吉の空襲の位置づけの深化など当面実施していく必要がある。米軍資料の継続調査・研究については言うまでもないことである。

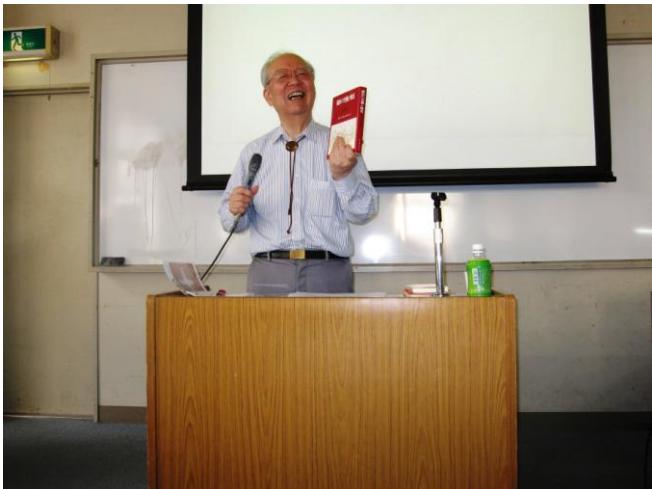
## 2. 講演

### 日吉台地下壕保存会のための横浜空襲の位置づけ

横浜市立大学名誉教授・横浜の空襲を記録する会会長

今井 清一

日本の戦争はもっぱら外征の戦争で、自国の国土を戦場として戦ったのは、太平洋戦争末期の沖縄戦と本土空襲だけです。自分たちの住んでいる国土が戦場となるのは、極めて悲惨なことだが、その悲惨さを日本はもっぱら近隣諸国に押し付けてきた。沖縄戦と本土空襲によって日本国民は近代戦の悲惨さを初めて実感することになった。その意味で、日本本土空襲を明ら



講演者 今井清一氏

かにすることは極めて重要なことです。この会で調べている日吉の空襲については茂呂さんが報告されましたが、これは東京、川崎、横浜などへの空襲と関連しています。

私は関東大震災の時に母親の胎内にいて、甲子園ができた翌1924（大正13）年の2月に生れました。私の成長期はまさに軍国主義と戦争の時代でした。小学校時代には次々と首相が暗殺され、中学校に入ると、軍部が実権を握って戦争をどんどんと拡げた。昭和18年のいわゆる学徒出陣には、同学年でも12月1日生まれまで入隊したが、私は20年1月に東京小平の陸軍経理学校の幹部候補生隊に入った。戦争の苦労の最も少ない組でした。

空襲は、遠くからは見たが、直接に体験したことはない。ただ親友が幾人も空襲で死傷した。一人は大学のフランス文学の本を疎開するため下町本所菊川町の奥さんの実家にいて3月10日の東京大空襲に逢い、遺体も判りません。も一人は5月25日の東京空襲で、母の手を引いて逃げたが逃げ切れず母は焼死し、自分も負傷してやっと助かります。彼はやがて母を見殺しにした罪の意識と、悲劇を作り出した戦時下日本の状況を問い合わせて、優れた長編詩「炎える母」を書いた。戦災死者はそれぞれに歴史と運命を背負っていることを頭におきたい。

私が5月29日朝の横浜大空襲にぶつかったのは、弘前連隊での隊付き実習勤務を終えて夜行列車で帰校する途中で、『新版大空襲5月29日』（有隣新書1995年）のあとがきに書いた。

「ちょうど新大久保駅にさしかかったところで、空襲警報のサイレンが鳴り出した。列車から降りて退避しながら見ていると、米軍のB29の大編隊が山手線の線路のはるか先のほうにつぎつぎと飛来して投弾を始めた。その地点からは白い煙がまっすぐにあがり、円筒状になって高くなぐりに激しく揺れ動き、それと同時に真っ黒な煙がもくもくと吹き出した。阿鼻叫喚の焦熱地獄になったにちがいないと、暗澹とした気持に襲われた。B29の編隊はつぎつぎとその上空に飛来して爆撃を続けた。周囲は一面の瓦礫の原となっていて目を遮るものはない。煙をあげて燃えているのは澁谷の方向だが、もっと遠そうだ。横浜だろう。そう話し合っているうちに、一時間あまりで空襲は終わった。空襲が本格化したころ内地の軍隊にはいった私は、申し訳ないようだが、多くの市民とちがって身近に空襲をうけ、怖い目にあったことはない。それだけに、この時の横浜大空襲の光景は長く目に焼きついて離れなかった。」

私は1952年に横浜市大文理学部に赴任するとすぐ、市の職員に横浜大空襲のことを訊ねたが、異口同音に火の回りが速かったと返事が帰ってきた。横浜大空襲の研究を本格的に始めたのは、1971年に空襲を記録する運動が起つてからで、横浜の空襲を記録する会と横浜市とが共同して編集した『横浜の空襲と戦災』全6巻では、「4 外国資料編」（1977年）と同じ大学の山極晃さんと編集し、横浜の空襲研究の基礎資料とした。ただお断りしておくと、私は横浜の空襲を記録する会の代表ではなく、それぞれに活動している世話人の一人です。

米軍のB29による日本本土空襲は、第二次大戦最末期の空襲で、それまでに研究し習熟した技術をつぎ込んだ空襲です。かねて日本の都市は木と紙で作られて燃えやすく焼夷弾に弱いとされていたが、日本は太平洋の壁とそこを守る連合艦隊の威力に頼った。他方、米軍は軍事力に加えて技術力でそれを乗り越えようと準備を重ねた。①連合軍は日独伊枢軸の中でドイツが最強の敵であるとして、ドイツとの戦争を優先させた。②その一方で、1939年以来、太平洋の壁を超える超長距離爆撃機B29の開発を進め、原爆開発費を超える巨額の開発費をつぎ込んで、1944年初頭までに実現にこぎつけ、これを陸軍航空軍の直轄下においていた。③1943年にはユタ

州の砂漠に日本式木造家屋のモデルを作り、それに有効なナバーム焼夷弾を開発実験するなど日本爆撃のための各種のメニューを翌44年にかけて作成した。焼夷弾開発にはスタンダード石油、目標選定には都市の火災危険度を調べる火災保険会社など、関係企業が協力した。

B29の生産は1943年末によく軌道に乗り、1944年4月に1爆撃団がインドのカルカッタと中国の成都の基地に配備された。6月に米軍が太平洋上のサイパン島に上陸作戦を行なうと、その夜に成都のB29部隊が北九州の八幡製鉄所を爆撃し、東西から日本本土攻撃が始まった。B29の行動半径は1600マイル(2575キロ)で、成都基地からは台湾、北九州と南満州までが入る。米軍はサイパン島を含むマリアナ諸島を占領すると11月にはB29部隊の73爆撃航空団を進出させた。東京、名古屋などへの攻撃が可能になり、航空発動機工場への昼間爆撃が開始された。年末から45年初頭にかけて313、314両爆撃団が増強されると、市街地住居密集地域への夜間焼夷弾無差別爆撃が始まる。最初の3月10日の東京大空襲では3爆撃団300余機のB29が東京下町の木造家屋密集地に1665トンの焼夷弾を投下し、折からの強い北風に乗って目標地区の外まで焼き、数時間で約10万人の死者を出し、米軍にとって残虐な大戦果を挙げた。続く10日間には名古屋、大阪、神戸また名古屋に夜間焼夷弾空襲が行なわれ、各都市の人口密集地区が焼かれた。この焼夷弾電撃戦では、3月9日までの空襲で投下された爆弾5397トンの倍近い9373トンの焼夷弾、爆弾が投下された。ただ横浜はこの時点での空襲は免れた。

この時期に焼夷弾爆撃への方針変更が行なわれた理由としては、ハンセル司令官の航空機工場への精密爆撃が効果を挙げないので、無差別爆撃論者のルメイに代わったためだと言われる。しかし大都市焼夷弾無差別爆撃のメニューはすでにできており、一つには焼夷弾で大都市を焼き尽くせるだけのB29が揃ったこと(焼き尽くせずに虫食い状態になると残りを焼くのが難しい)、もひとつには仲々戦果が上がらず陸軍航空軍の立場がくるくなり早くB29の威力を示す必要に迫られたことがあげられている。(荒井信一『空爆の歴史』2008年)

この3月の都市空襲で目標とされたのは、焼夷地区1号。米軍は、日本の近代工場は鋼鉄やコンクリートの建築だが、労働者は付近の薄っぺらの木造家屋に集中居住している、住居密集地を焼き尽くせば軍需生産に大打撃を与えることができるとした。英国には1平方マイル(=2.59平方キロ)当り人口密度6万4千人以下の市街地では効果が少ないとの調査もあった。そこで最過密地域を焼夷地区1号、次を焼夷地区2号とした。第1図の右上から左下への斜線が引かれた区域が焼夷地区1号、左上から右下への斜線区域が焼夷地区2号である。朝日新聞と神奈川テレビの好意で入手した米経済戦争局報告書『日本都市への大規模攻撃の経済的意義』(1943年2月)には各都市の区ごとの人口密度の一覧がある。東京の焼夷地区1号は人口密度が13万~8万人の浅草、本所、神田、下谷、日本橋の各区を中心に7万人台の、本郷、京橋、深川各区の一部を加えた地域である。大阪も神戸も中心部の人口密度は9万から8万人、名古屋はやや低く6万人、これに対して横浜は最高の中区が2万人に過ぎない。第1図の横浜の焼夷地区1号は大岡川と中村川に挟まれた釣り鐘地域だけだ。横浜が3月の夜間焼夷弾空襲から除かれたのは、区単位の広さの人口密集地区がなかったからだろう。

しかし横浜は、目標としての重要性がなかったわけではない。先の報告書は、1935年と40年の国勢調査での人口増加を調べ、これを軍需産業増加の指標として注目する。第1表を見ると、横浜の増加率は37.5%と6大都市の最高で、これに名古屋22.7%、東京15.4%が続き、大阪8.8%、神戸6.0%と関西の都市は低い。最高は川崎の56.9%で、関西で対応するのは尼崎の59.3%だ。危機感を覚えた大阪ではいち早くこの点に着目した。菅野和太郎「産業都大阪の将来」『都市問題』1941.7は、大阪の人口増加率は1930~35年には高かったが、35~40年には低下した。30年代前半には綿製品や雑貨などの輸出が伸びたのに、後半には新興の機械器具工業と軍需工業で立ち遅れたためだとして、資本力の弱さと東京に遠いことに原因を求めた。戦後の『新修大阪市史』は大阪の重工業は伝統的に重厚長大中心で、航空機、自動車や精密機械器具工業など軽薄短小の分野で立遅れたとする。

第1表 6大都市と川崎市国勢調査人口増比較表 1930年35年40年各10月と44年2月  
『日本都市年鑑』による 年度による市域のずれで多少数字が違う

	1930年	1935年	30-35年增加率	1940年	35-40年增加率	1944年2月	40-44年增加率
東京	4970839	5875667	18.2%	6778804	15.4%	6575892	-3.0
大阪	2453573	2989874	21.9%	3242340	8.8%	2842978	-12.6
京都	952404	1080593	13.5%	1089726	0.8%	966981	-11.4
名古屋	907404	1082816	19.3%	1328084	22.7%	1349361	1.6
神戸	787179	912179	15.8%	967234	6.0%	966931	-6.5
横浜	620306	704290	13.5%	968091	37.5%	1035321	6.9
川崎	148447	191700	29.1%	300777	56.9%	381458	26.8

第2表 横浜市区別国勢調査等人口増比較表 『横浜市会史』第5巻 1985年、増加率はこれより算出

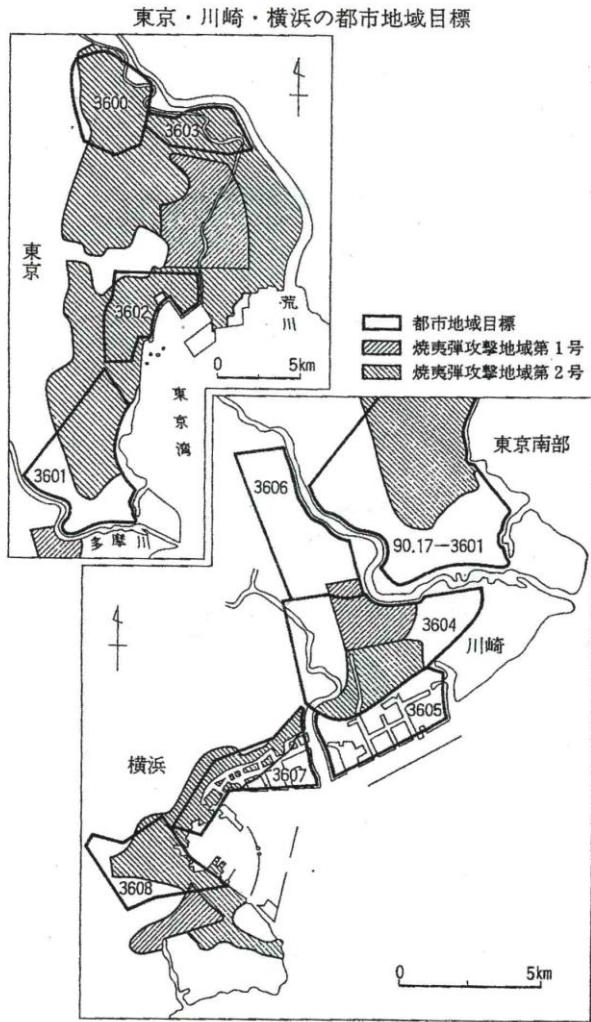
区名	1930年	35年	増加率	40年区域の35年	40年	増加率	43年2月調	増加率
鶴見区	81210	113963	40.3%	113963	172587	51.4%	196753	14.0%
神奈川区	133777	155908	16.5%	141797	169408	19.5%	174339	2.9%
中区	329678	348941	5.8%	348819	386020	10.6%	382418	-0.9%
保土ヶ谷区	41557	47642	14.6%	56193	63981	13.9%	66421	3.8%
磯子区	34084	37836	11.0%	53643	76966	43.5%	105183	36.7%
(のちの金沢区を含む)								
港北区				47535	56432	18.7%	63060	11.7%
戸塚区				34505	42697	23.7%	50193	17.6%
全市	620306	704290	13.5%	796579	968091	21.5%	1038367	7.3%

ここで横浜の人口増加を第2表で見ると、中央部の中区は停滞的で、鶴見区と後の金沢区を含む磯子区が高い。1943年2月に秘密に行なわれた人口調査では磯子区が断然トップになる。44年には分区があり、ようやく人口密度は西区5万余人、中区3万余人になるが、それでも低い。大阪では大阪城のすぐ北に陸軍砲兵工廠があり、横浜は南端の金沢八景に海軍航空技術廠支廠があったことも、こうした両市の違いを象徴する。

焼夷地区1号はもっぱら人口密度から割り出した住居密集地域であるが、もっと軍需産業に注目したメニューもあった。それが工業市街地地域で、主要都市の重要な軍需工場と労働者住宅とが混在する地域を選んで、工業上の重要度に応じてABCに格付けしたもので、第1図で3600から3608まで番号がつけられた地域である。4月にはB29が沖縄戦に動員され、都市焼夷弾空襲は2度しかなかったが、4月13日には3600の赤羽の東京造兵廠地域が、15日の空襲では、3601の蒲田と3604の川崎・鶴見の工場住宅混在地域が目標となった。焼夷地区1号への焼夷弾空襲は非戦闘員への無差別爆撃で、弁解できないので、こちらに変えたのだろう。『米陸軍航空軍史』は、焼夷地区1号については全く説明がないが、工業市街地地域は詳しく説明している。これらの地図は『新版大空襲5月29日』によった。地区名の訳語は、その後簡潔になったので、地図と本文とでずれがあるが、了承されたい。

B29の都市空襲は5月中旬から再び活発になった。米航空軍では、5月8日のドイツ降伏と沖縄戦の一段落を利用して、日本への本土上陸作戦を行なわずに空爆で降伏させようと、都市の焼夷しを図ったのである。硫黄島基地の戦闘機の援護をうけ、昼間複数の目標への空襲などで名古屋、東京、横浜、大阪、神戸、尼崎の各大都市が次々と焼き尽くし、目標から外した。横浜は原爆攻撃の第3目標にされたが、5月28日にそれから外されると、翌29日朝に500機のB29が護衛戦闘機100機と来襲、5つの目標を各爆撃団に割当て、大型と小型の焼夷弾2570トン1時間8分の間に投下し、市民に逃げる間に与えず中央部の市街地の大半を焼き尽した。警察発表の6月4日6時現在の被害状況は死者3649人とするが、『神奈川県警察史』もこれは検死分だけでもっと多いとしており、実際にはそのほぼ2倍にのぼると推定される。

図1-1(「新版大空襲 5月29日」今井清一著より)



第21爆撃機集団中央判読班「損害判定報告」付図から作成

図1-2(同右)

損害判定報告・横浜市  
1945年5月29日 第21爆撃機集団作戦任務第186号

第21爆撃機集団中央判読班「損害判定報告」第80号付

◎ 313回 × 314回 ◇ 58回 ◎ 73回

この短時間に圧縮された空襲の仕組みを、時間で解析した第3表を参照しながら説明しよう。B29部隊の基地は4つの飛行場で構成され、横浜空襲当時のマリアナにはテニアン北飛行場に313爆撃航空団、グアム北に314団、テニアン西に58団、サイパンイスレーに73団が配備された。1爆撃航空団(Wing)は4航空群(Group)で、各群は4つの中隊できていた。この日は丘などで区切られた横浜中央部の市街地を焼き尽くそうと北から国鉄東神奈川駅、横浜駅西南の平沼橋、関内と関外をつなぐ港橋、それに関外南端の吉野橋と本牧の大鳥国民学校の5地点を目標点に選び、これらをこの順で各航空団に割り振った。最後の73団には最初の2群に大鳥校、との2群には吉野橋が割り振られた。B29は離陸に時間が掛かるので、4飛行場からほぼ同時に離陸を始め、日本時間にすると、1時40分から3時24分までの間に510機が出発した。そしてテニアン北の313団の505群にグアム北の314団の39群がというようになります第1発進の各群、ついで第2、第3、第4発進の各群と続き、硫黄島を経て御前崎で地上にのぼり、ここで時間調整を行なった。そして進入点の富士山(宝永山)を最初の505群が9時に通過を始め、次の群がDプラス4分という風に4分間隔で、全部で16群だから、最後の群はDプラス60分、つまりちょうど10時から進入点を通過した。各群は、進入点から一直線に目標に向かうこととされ、各群にはそれぞれの目標に対する81度半から84度半までの攻撃軸線が指定された。真北から時計回りでこれだけの角度から目標を攻撃せよとの指令である。90度だと真西だからそれより少し南からの攻撃になる。

B29は、9機内外のかもめ状に横に並んだ編隊で1分おきに進入し、まず505群の4編隊が

東神奈川に焼夷弾を投下すると、次の39群が平沼橋を攻撃、それに58団の462群の港橋に投下、続く73団の500群は本牧大鳥校に投下、次ぎの313団の504群はまた最初にもどつて東神奈川を攻撃した。各団の各群が5つの目標に輪番に焼夷弾を投下したのである。各群の下にある数字は各群が日本軍の戦闘機や高射砲の攻撃を受けた時間で、この時間にはB29の各群が目標の上空にいたことになる。激しい対空砲火で撃墜されたB29は3機、体当たりによる撃墜は2機、計5機の損失だったが、破損は168機に達した。爆撃時間は9時22分から10時30分まで正味1時間8分と極めて短い。この空襲で、5つの目標を輪番に投弾する方式をとったのは、縦深になる目標を、少なくとも最初は火災の煙で覆われる前に目で見て投弾させるのが狙いだった。また海からの風を予想して風下になると思われる北側の目標から投弾が始まられた。当初は無風だったが、やがて激しい南風となった。横浜大空襲は、極めて広い面積を焼き尽くし、司令官のルメイは極めて優秀な成績と報告した。

この直後に行なわれた6月5日の2度目の神戸空襲は同じ昼間焼夷弾空襲であるが、攻撃順序は極めて単純で、大ざっぱにいうと、住吉駅、六甲駅、神戸製鋼所、三宮駅、鷹取駅と東から並んだ目標地点を、最初の群から3群ずつがこの順に攻撃した。神戸は大阪湾に面して伸びており、ほぼ海岸沿いの目標点を、紀淡海峡の沖ノ島を進入点として南から攻撃したから、横浜のように煙への配慮は不要だった。神戸の各目標点は一挙に3航空群による激しい攻撃を受けたが、そのあとの投弾はなかった。こうした被災の違いは、例えば野坂昭如の神戸空襲の記録や小説を見ても判る。これで横浜大空襲に関連した説明は一段落とする。

次に、日吉空襲は、他の目標への空襲の余波と考えられるので、『横浜の空襲と戦災3』公式記録編を利用して日吉に關係すると思われる横浜の空襲を見よう。

2月16-17日艦載機の波状攻撃、硫黄島作戦準備の飛行場攻撃、機銃掃射などで鶴見・港北地区で火災、

2月19日B29の日本石油爆撃で火災、

3月10日樽町の寮に転用された元温泉旅館、24棟火災、延焼でなく多数の個別火災、東京大空襲の余波、

4月3-4日夜間空襲 立川航空機工場を第1目標とする73爆撃航空団は、藤沢辺で陸地に上がり、2分後に地上が見ないときは第2目標の川崎工業市街地を爆撃せよとの指令をうけ、61機が立川航空機を、48機が川崎市街地を爆撃、川崎に500ポンド爆弾1500発、70ポンド焼夷弾552発と照明弾54発を投弾したとされる。横浜の神奈川区や日吉は川崎への途中なので、川崎と思って投弾し、報告でも川崎の中に入っているようだ。(「川崎大空襲」『有鄰』365号 1998.10) 警察署別の死者と全焼戸数は、西戸部112人378戸、神奈川65人139戸、鶴見37人11戸、川崎111人53戸、川崎臨港51人23戸、中原32人6戸である。被害は横浜のほうが多い。

4月15日の川崎・鶴見市街地への夜間焼夷弾空襲 313,314両航空団による工業市街地目標の空襲で、鶴見地域も焼き払われ、区役所も焼失した。この空襲では消火活動を妨害するため通常爆弾や破碎爆弾を混ぜて投下されたが、横浜大空襲では、大型と小型の焼夷弾をもっぱら短時間に投下して住民を焼き殺す戦術がとられた。

5月24日の東京市街地空襲 この空襲は特に横浜周辺部への投弾が多い。これは初めて東京市街地という広い地域が目標として指定され、工夫も凝らしたようだが、目標に到達するのが困難だったためかも知れない。

横浜大空襲以後は攻撃目標は大阪、神戸、尼崎に移り、これらの空襲で大都市焼き尽くし空襲は終わった。そして6月以降は軍需工場への昼間低空爆撃と中小都市への夜間焼夷攻撃(1夜4都市)を組合せて実施した。最近の空襲戦災を記録する会全国連絡会議は主に関東、東北の都市で行なわれているが、米軍は小都市を爆撃する理由として軍需生産上の重要性を挙げるが、実際には燃えやすい場所や住民の避難する場所を選んで投弾している。この段階になると、小都市に多量の焼夷弾が、予告爆撃、破碎爆弾の混用などの手の混んだ手法で投下され、多数の非戦闘員を殺傷している。これに原爆投下とその準備の原爆模擬爆弾投下が加わる。敗北が

決定的で降伏も時間の問題となった日本に、米軍が不要な爆撃と非戦闘員殺傷を続けたのは、ソ連をにらんで日本の早期降伏をはかることと、巨額の予算による兵器開発への申し開きをするためと考えられそうだ。

第3表 5月29日横浜空襲の時間解析 時間は日本時間に換算した

5.29 横浜		日本時間					
飛行場	テニアン北		グアム北		テニアン西		サイパンイスレー
爆撃団	313 団		314 団		58 団		73 団 Wing
機数	83 機		146 機		132 機		149 機
目標	東神奈川駅		平沼橋		港橋		大鳥校 お三の宮
出発時刻	401 -504		340 -507		344 -513		407 -524
進入点は富士山(宝永山)		D=29日9時			次の群は4分ずつ後で、最後の群は10時進入		
第1発進	505群		39群		462群		500群 Group
	922 -929		925 -930		927 -935		929 -930
第2発進	504群		19群		468群		497群
	938 -1010		940 -943		948 -957		951 -954
第3発進	6群		29群		444群		498群
	944 -1013		1003 -1008		956 -1010		1007 -1010
第4発進	9群		330群		40群		499群 D+60分
	不明		1015 -1029		1014 -1018		1023 -1028
回上空時間	922 -1013		925 -1030		927 -1018		929 -1028
攻撃機数	65機		131機		122機		136機
目標は爆撃中心点			各群の時間は目標上空で砲火を受けた時間				

### 2009年度総会

### 2008年度活動報告

2008年度の出来事として特筆すべきは9月末に高校体育館建設工事に際し、高校のバーレーコート・バスケットコートの造成で埋められていた、軍令部第3部等の使用していた地下壕入坑部が三基発掘された事です。慶應義塾は「日吉台地下壕に関する諮問委員会」の審議を経て、入坑部を破壊せず、体育館建設を北に60m移動することにしました。4月12日に入坑部二基の公開見学会が行われ、300名を超える見学者があり新聞各紙にも報道されました。地下壕は工事のため一度埋め戻されますが、私達はこの戦争遺跡を再び眠らせることなく、毎年2000名を超える見学者が訪れる連合艦隊司令部地下壕と共に現在に活用できる方法を求めていきたいと思います。

2008年度総会は5月24日慶應大学藤山記念館会議室で土方貞彦氏の「大和特攻に関する講演ではじまり、議事を滞りなく終了しました。

資料に乏しい日吉地区の空襲の実態を調査するために、昨年度から始めた地域の方の聞き取



報告者 喜田美登里

りは今年度6回行い、横浜空襲を記録する会との合同研究会はフィールドワークを含めて5回実施しました。菊名から日吉周辺の空襲の実態が少しづつ判ってきました。

会員の方と行く「戦争遺跡ツアー」を3回実施し、参加者も多く好評でした。

地下壕見学会は54回、2223名を案内しました。10名程のガイドで案内していますが、年々見学希望が増加し、新たなガイド養成が必要です。昨年8月に日吉台地下壕が読売新聞やタウン紙に紹介されたことで、見学申込が殺到し、受け入れには年末までかかりました。また、市外、他県からの平和学習・修学旅行の申込も増えてきました。

見学資料の冊子『戦争遺跡を歩く 日吉』を5000部増刷しましたが、2006年の初版発行から四版を重ね、計14,000部となりました。

8月9日～11日第12回「戦争遺跡保存全国シンポジウム」愛知県名古屋大会（名古屋大学）には11名が参加、第2分科会では日吉の空襲に関する実態調査について運営委員の茂呂秀宏が発表しました。

10月9日～11日第16回「横浜・川崎平和のための戦争展2008」を慶應日吉キャンパス来往舎ベントラス・会議室で開催し、300名の参加者がありました。

3月14日に第1回を行った「日吉をガイドする講座」は85名が参加しました。この講座は2009年度も継続し、6月20日に第2回を開催します。どうぞご参加ください。

地域との交流では、慶應大学生主催の「日吉フェスタ」に今年度も参加。慶應義塾の「HRP2008（ヒヨウサーキュートフォーリオ）」、日吉地区センターの30周年記念文化祭、その他の地域イベントに参加しました。

※ 11月慶應義塾創立150周年を記念して『慶應義塾史事典』が刊行され、日吉台地下壕保存の会の項目が掲載されています。

## 日吉台地下壕保存の会

- ◆会員数 個人308名 団体9
- ◆定期総会開催 第20回 2008年5月24日
- ◆運営委員会開催 12回 6月11日～2009年5月13日
- ◆会報発行 4回 第88号(6.28) 89号(8.30) 90号(1.24) 91号(4.17)
- ◆地下壕見学会 54回 5.14～09.4.27 参加者2243名（小学生～大学生約900名）
- ◆空襲の聞き取り調査 6回 6.11～10.4
- ◆横浜空襲を記録する会との合同研究会 5回 09.1.18～5.9
- ◆9月末に発掘された日吉台地下壕（軍令部第3部・東京通信隊・航空本部）について  
10.2 現場視察・相談会（慶應義塾、建設会社、神奈川県・横浜市文化財課、保存の会）  
3.30 地下壕入坑部見学 運営委員他9名  
4.7 慶應義塾に要望書を提出（現状保存・現地説明会の実施）  
4.12 慶應義塾による地下壕入坑部の公開見学会 参加者約300名
- ◆冊子『戦争遺跡を歩く 日吉』増刷5000部（2008.7.31）
- ◆5.30～6.1 「平和のための戦争展inよこはま」（かながわ県民センター）に出演
- ◆8.9～11 第12回戦争遺跡保存全国シンポジウム愛知県名古屋大会（名古屋大学）に11名参加（全体会・分科会報告・総会・フィールドワーク）
- ◆9.12～14 日吉地区センター開館30周年記念文化祭 展示参加
- ◆10.4 「日吉フェスタ2008」（慶應大学ヒヨウサーキュートフォーリオ）  
展示・書籍、ねり飴販売で参加
- ◆10.9 日吉台小学校6年生の「戦争体験」を聞く会に参加
- ◆10.9～11 第16回横浜・川崎平和のための戦争展2008開催（慶應大学日吉キャンパス来往舎）  
主催：横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会 後援：港北区  
展示（日吉台地下壕・登戸研究所・蟹ヶ谷通信隊地下壕）・若者の発表「平和学の視点から」・シンポジウム「大学における平和ミュージアムの役割」白井厚・山田朗・朗読

「上原良司の所感」須田輪太郎

◆11.14~15 「HRP2008 (Hiyoshi Research Portfolio 2008) <知>をめぐる社会との交流・協働の場」・慶應義塾創立150周年企画「日吉の過去・現在・未来」地誌から見た日吉

講演会「日吉台地下壕の保存と活用」新井揆博・展示・地下壕見学会で参加

◆戦争遺跡ツアー

7.27 戦争遺跡特別見学会<YMCA 東山荘慶應日吉の鐘・山梨平和ミュージアム>16名

9.21 新井さんと歩く神奈川の戦争遺跡 猿島・観音崎砲台群・戦没船員の碑 35名

11.24 9.21のツアーが雨で中断したため、再度行う 参加者 15名

◆3.14 第1回《日吉をガイドする講座》日吉台地はこんなに多様でおもしろい（来往舎）

講演「日吉台地の成り立ち一自然地理の学問分野から一」松原彰子・「横浜と川崎の戦争遺跡に学ぶ」新井揆博

◆3.14 鮎が崎プレイパークこどもまつり 野外展示

2008年度決算報告・2009年度予算・人事

2008年度 決算報告 (単位 円)

費目	2008年度予算	2008年度決算	備考
<b>【収入の部】</b>			
会 費	250,000	293,300	228名
見学会資料代	400,000	499,240	内訳別項
図書等領布	0	64,650	
寄付金等収入	0	64,726	
縁 越 金	701,444	701,444	
計	1,351,444	1,623,360	
<b>【支出の部】</b>			
運 営 費	200,000	150,394	各種会合・打合せ等
事 務 費	60,000	54,523	事務用品費等
印 刷 費	80,000	67,945	会報・資料等
通 信 費	200,000	173,502	会報郵送費等
図書資料費	110,000	75,970	書籍・資料等
交流・交通費	150,000	132,100	全国集会・各平和展賛助金等
謝 礼	30,000	30,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	446,250	5000冊
予 備 費	321,444		
計	1,351,444	1,130,684	
差引残高		492,676	

見学会開催費用内訳

収入の部	支出の部	保険料	188,400
見学会費用	862,100	振込手数料	5,460
		案内経費	169,000
		※資料作成費	499,240
合計	862,100	合計	862,100

※資料作成費は2008年度決算の見学会資料代に計上しています

以上の通り報告します

2009年5月14日

日吉台地下壕保存の会

会計 亀岡 敦子 

この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子 

会計監査 山口 園子 

2009年度 予算(案) (単位 円)

費目	2009年度予算	備考
<b>【収入の部】</b>		
会 費	250,000	
見学会資料代	400,000	
図書等領布	0	
寄付金等収入	0	
縁 越 金	492,676	
合 計	1,142,676	
<b>【支出の部】</b>		
運 営 費	200,000	各種会合・打合せ等
事 務 費	60,000	事務用品費等
印 刷 費	80,000	会報・資料等
通 信 費	200,000	会報郵送費等
図書資料費	110,000	書籍・資料等
交流・交通費	150,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝 礼	30,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	0	
予 備 費	312,676	
合 計	1,142,676	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました

2009年5月23日

日吉台地下壕保存の会

運営委員会



会計監査 山口園子

2009年度日吉台地下壕保存の会  
運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問  
会長 大西 章  
副会長 新井 揆博 鈴木 順二

運営委員 岩崎昭司 上野美代子 岡上そう 亀岡敦子 喜田美登里 桜井準也 杉山誠  
鈴木高智 高橋保二 谷藤基夫 常盤義和 都倉武之 富澤慎吾 中沢正子  
中谷俊吾 長谷川崇 古川晴彦 宮本順子 茂呂秀宏 山田譲 渡辺清  
会計監査 熊谷紀子 山口園子  
顧問 永戸多喜雄 鮫島重俊 白井厚 東郷秀光

### 2009年度活動方針

1989年に日吉台地下壕保存の会が発足して、今年で21年目になります。昨年成人式を終わり、新たな一步を踏み出しました。この間会員の方々、全国の戦争遺跡保存運動に携わっている方々、日吉地域住民の方々とともに活動を続けることが出来ました。

昨年度慶應義塾体育館建設工事に伴い、今まで所在の正確な場所が特定できなかった軍令部第三部等の入口が発見され、入口付近の調査、また簡易的な地下壕内部調査が行なわれました。その詳細な調査結果は今後の報告を待たなければなりませんが、地下壕の研究が新たな局面に入ったことは確実です。しかし、これから地下壕全体の本格的な調査は慶應義塾だけではなく、国や県の支援があって出来ることで、文化庁による戦争遺跡指定の早期実現が待たれます。

また、見学会の重要性は質・量ともますます大きくなってきました。勉強会や研究大会などを通じて、新たな事実がわかり、戦争の実相を少しずつですがより正確に伝えることが出来るようになりました。しかし、見学希望者の増加に組織が対応できなくなりつつあることも事実です。そのためガイド養成講座等を実行し、成果を上げつつありますがまだ十分だとは思えません。より多くの方々が気軽に参加出来るような活動にしていかなくてはならないと考えます。

今年度の活動方針は地道な日常的な活動の継続と同時に文化庁による戦争遺跡指定の早期実現、慶應義塾への『日吉平和ミュージアム』建設の働きかけがあります。すぐに可能なことではありませんが少しずつ実績を積み重ねて実現したいと考えています。

そのために以下の活動方針を提案致します。



報告者 大西章

#### 活動方針

- 『日吉平和ミュージアム』の建設に向けて努力する。
- 戦争遺跡指定の早期実現を文化庁に働きかける。
- 日吉台地下壕見学会の内容を充実させる。
- 小・中・高校生のための見学会を開催していく。
- 日吉台地下壕の学術調査・研究及び学習会を開催する。
- 慶應義塾・横浜市・県・国への働きかけを港北区住民の方を始めとする地域の方々と連帯して行う。
- 全国の戦争遺跡保存運動の会との連携を深め、保存運動を盛り上げていく。
- 運営委員会の活動の充実と拡大強化をはかる。

## 第13回戦争遺跡保存

### 全国シンポジウム松本大会要項決定！

昨年の名古屋大学における大会からはや1年、松本での大会が迫ってきました。要項が発表されましたのでお伝えいたします。本会はこのシンポジウムの呼びかけ団体の一つとして第1回から欠かさず参加してまいりました。昨年は日吉の空襲などについて発表し、大きな成果を発表することができました。会員各位の積極的なご参加をお待ちしております。

なお詳細は保存の会運営委員までお尋ねください。要項・参加申し込み方法などお知らせいたします。

○日 時 2009年8月8日(土)～10日(月)

○大会テーマ 戦争の事実をどう伝えるか・・・

戦争遺跡の調査研究活動を通して、保存・文化財指定・活用を考える

○主催 戦争遺跡保存全国ネットワーク

第13回戦争遺跡保存全国シンポジウム松本大会実行委員会

○シンポジウム会場 松本第一高校(〒390-0303松本市浅間温泉1-4-17)

○宿泊 ホテル筒井(浅間温泉 住所 松本市浅間温泉1-29-17)

TEL 0263-46-1120 FAX 0263-46-1124

松本第一高校からの交通 徒歩約10～15分

○日程 8月7日(金) プレフィールドワーク

(1) 諏訪地方の戦争遺跡(諏訪鉱山・防空監視哨など)

(2) 木曽発電所関係(中国人強制連行)・陸軍伊那飛行場関係

(3) 平岡ダム周辺(強制連行現場 朝鮮人・中国人・連合国捕虜)

8月8日(土) 正午～ 戦争遺跡保存全国ネットワーク総会

13:00～開会行事

13:30～記念講演 中馬清福氏(信濃毎日新聞社主筆)  
演題「戦跡から見えてくる戦争と平和」

13:30～シンポジウム

特別講演(中国河北省の戦争遺跡 陳俊英氏)

中国湛江師範大学日本研究所 副所長)

基調報告

18:30～交流会

8月9日(日) 分科会 9:00～12:00

13:00～15:00

1. 保存運動の現状と課題

2. 調査の方法と保存整備の技術

3. 平和博物館と次世代への継承

特別分科会 中国人強制連行

全体会15:30～

8月10日(月) フィールドワーク(80人までバス2台)

松本市の戦争遺跡(50連隊赤レンガ建物・里山辺地下壕・中山半地下工場跡・陸軍松本飛行場跡・松本憲兵隊長官舎・銃剣道場跡・陸軍墓地・・・)

○費用 参加費 2000円(一日参加は1000円、大学生500円 高校生以下無料)

交流会費 4000円(井筒宿泊者は2000円)

昼食代 800円

宿泊費 9600円(1泊2食入湯税込み)

フィールドワーク費用 各コース貸切バス3000円+昼食800円+資料代

計約4000円

## 活動の記録 (2009年4月～6月)

4/17 運営委員会 会報91号発送(慶應高校物理教室)

地下壕見学会 錦台町会 10名

4/25 定例見学会 53名

4/27 地下壕見学会 港北老人クラブ 20名

5/2 定例見学会 40名

5/8 地下壕見学会 立川高校OB 18名

5/9 横浜大空襲を記録する会との合同研究会  
(菊名ハイツ)

5/12 地下壕見学会 慶應大学 人文科学特論他  
(安藤先生) 36名

5/13 運営委員会 (慶應高校物理教室)

5/18 地下壕見学会 愛知県豊田市下山中学校 3

年生他 90名

5/19 地下壕見学会 品川区教育委員会平和指導資料作成委員会 13名

5/21 慶應日吉キャンパス(蝮谷) 軍令部第三部・航空本部等地下壕内部調査  
測量・写真撮影等 20名

5/23 第21回日吉台地下壕保存の会 講演会・定期総会(藤山記念館会議室)  
講演「横浜空襲の位置づけ」今井清一氏・調査報告「日吉の空襲について」茂  
呂秀宏氏  
総会後懇親会

5/28 地下壕見学会 セカンドライフクラブ 30名

5/28～31 「2009 平和のための戦争展 in よこはま」に展示参加(かながわ県民ホール  
センター) 28日準備作業 29～31日特別企画と展示(約500点)

5/30 定例見学会 52名

6/1 地下壕見学会 京都市下鴨中学校3年生他 190名

6/9 地下壕見学会 港北見聞録の会 60名

6/12 地下壕見学会 港北区民生・児童委員 19名

## 予定

6/19 運営委員会 会報92号発送(慶應高校物理教室)

☆☆定例見学会(毎月第4土曜日13時～に予定)

6/27 ～ 7/25 (6月・7月は申込多数のため締め切りました)

夏休み見学会 8/1(土)・8/4(火) 9時30分～、13時30分～  
8/29(土) 13時～

9/26 ～ 10/24 ～ 11/28

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/> (新アドレス)



日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上  
発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会  
日吉台地下壕保存の会運営委員会